

A. シヴァナンダン「新時代のたわごと」¹ にみる 新自由主義時代の社会運動

A Study of a Social Movement in the Neoliberal Era with a Focus on
'The Hokum of New Times' by A. Sivanandan

稲垣 健志
INAGAKI Kenji

はじめに

1970年代前半にエジプトやチリで実験的に始められた新自由主義²は、今や世界中の国家でその理論と政策が採用されている。こうした今日の趨勢において特徴的なのは、新自由主義を標榜する政権に対し、けっしてその政策の恩恵を受けない人々、むしろそれによって不利益を被る人々が進んでその政権を支持する現象が多く見られることである³。なぜ新自由主義の「犠牲」となるものたちが、それを進める政権を積極的に支持するのか。1980年代のサッチャー政権を分析対象にして、この問いに答えようとしたのがスチュアート・ホールたちである⁴。保守党党首としてサッチャーが三度目の総選挙に勝利した直後、ホールは次のような説明をしている。

私の見解によれば、人々がサッチャリズムに投票するのは、彼（女）らとその細かな点まで支持しているからではない。人々は心の中で、イギリスが今や驚くほど繁栄し、経済的に成功しているとは思っていない。375万人の失業者を抱える経済が回復しつつあるとは誰も思っていない。（中略）イデオロギーとしてのサッチャリズムは、国民の恐れ、不安、失われたアイデンティティに訴えかけている。われわれに政治をイメージで考えるように促しているのだ。そ

れはわれわれの集合的ファンタジー、想像の共同体としてのイギリス、そして社会的想像力に訴えかけているのだ。⁵

ホールによれば、サッチャー政権が支持されたのはその「新自由主義政策」ではなく、彼女らが創り出す「イギリスのイメージ」だったという。デヴィッド・ハーヴェイが指摘するように、新自由主義国家は資本蓄積を制限しようとするあらゆる形態の社会的連帯に敵対し、時には弾圧を加える⁶。そして国民を個別化してそこに市場原理を導入し、「自己責任」と「受益者負担」を求めるわけである。このように、新自由主義は社会的連帯を排し個人であることを強制することで成り立つと言えよう。しかしそれでは国家としての体裁は維持できない。そこで「国民」、とりわけ「強い国民」というものを再創造して、バラバラにされた人々を張りぼてのごとくつなぎあわせなければならない。1980年代イギリスという文脈で、こうした「強い国民」を作り上げる絶好の契機だったのが、1982年のフォークランド紛争であった。イギリスから遠く離れた「我が領土フォークランド諸島」をアルゼンチンから「奪還する」という物語は、何ら経済効果をもたらさない、むしろ時代錯誤の帝国主義的政策であった。しかしホールが指摘するのは、こうした「退行的近代化」(regressive modernization) と言えるサッチャーの

政策が、「新時代」にうまく合致するものだったことである。第2次産業が衰退し、サービス産業が興隆するなかで、人・もの・情報の大量かつ素早い移動が可能となり、「柔軟で競争できる」労働市場が生まれた。その結果、人々は共有できる集合的アイデンティティや文化的帰属性を持つことが困難となった。こうした時代をホールは「新時代」と呼び、さらに次のように皮肉っている。先ほどの引用の続きをみてみよう。

サッチャーがそうした語法を体得したのに対し、左翼は絶望的なほど「自分たちの政策」にこだわり語ろうとしたのである。⁷

サッチャーをめぐる一連の議論を通して、ホールたちはこの「新時代」の政治を左翼に取り戻すために、まずはサッチャリズムに学べと鼓舞し続けたのである。こうしたホールらの議論は、現在でもわれわれに有益な論点を提示してくれるが、同時に当時から論争含みでもあった⁸。中でもホールらの議論を「たわごと」と痛烈に批判したのが、アムバラヴァネル・シヴァナンダンだった。

1923年、当時のイギリス植民地セイロンに生まれたシヴァナンダンは、1958年にイギリスに渡ったいわゆる移民一世である。レストランでのアルバイトなどを経て、1960年代半ばに人種関係研究所の図書館司書に就任している。そして1972年、後述のように研究所を「乗っ取り」、人種関係協会を立ち上げ、大学などのアカデミズムの世界とは一線を画し、現在に至るまで反人種主義運動を牽引しつづけている。かつてホールもシヴァナンダンの著作に序文を寄せ、「彼は20年以上にもわたってイギリスにおけるブラックの闘争を支え続けてきた知識人」であり、「その論文やエッセイは闘争の『前線』から送られてきたものである」と評価している⁹。ではそのように「闘争の前線に立つ」シヴァナンダンにとって、ホールらの議論の何が「たわごと」だったのか。そして、新自由主義の隆盛という「個人であることを強制される」時代の矢面に立たされた彼らは、どの

ようにこれに抗い自らの運動を展開しようとしたのか。「たわごと」を手がかりに、こうした点を明らかにすることが本論文の目的である。

1. 1970年代におけるアイデンティティ・ポリティクスの失敗

シヴァナンダンが主導する人種関係協会および、そこから派生したレイス・トゥデー・コレクティブは¹⁰、1970年代においてアイデンティティ・ポリティクスの失敗を目の当たりにしている¹¹。そしてこの経験が、80年代のサッチャーをめぐる議論に影響を与えていくことになるのである。したがって、まずは70年代から話を始める必要があるだろう。しかし、人種関係協会に関する日本での研究は、管見の限り拙論の他にはなく、よく知られた存在であるとは言いがたい。そこでここでは人種関係協会の歴史的概略をたどりながら、彼らがどのような「失敗」に直面したのか確認してみたい。

人種関係研究所の創設

人種関係協会の前身は1952年に王立国際問題研究所内につくられた一部局である。その部局が58年に人種関係研究所¹²として独立した。当初、研究所は急速に脱植民地化が進むアフリカ諸国における人種関係の悪化、また共産国側がそうした状況を利用することへの懸念から、アフリカ諸国の人種関係の調査を中心におこなっていた。しかし、58年に白人と移民の若者のけんかに端を発したノッティンガム・ノッティングヒル暴動がおこると、イギリス国内に「人種関係」を発見し、それ以降、調査対象をアフリカ諸国からイギリスへと徐々にシフトしていくことになる。それらの調査は概して、イギリス国内の人種関係の「問題」を取り上げ、それを解決するための政策や法律を政府に提言するもので、研究所はイギリスにおける人種関係に関する政府のシンクタンクの役割を果たしていた。その立場は、「人種の違い」をアプリアリに認め、必要なのはあくまで人種関係の調和であるというものであった。その最たる

「成果」が、1969年に出された『カラーと市民権：イギリスの人種関係に関する報告書』¹³である。これは1962年に、人種関係研究所の評議員であったジム・ローズを代表とし、ナフィールド財団から£93,500の助成金を受けて立ち上げられたプロジェクトが7年かけてまとめたものである。800ページを超えるこの報告書は、丹念な調査により移民の被差別的・被抑圧的な生活状況を明らかにして、それを改善しようとするリベラルな姿勢を一貫して持っているように見える。しかし、研究所が発足以来持っていた、「どうすれば人種間の混乱を抑え管理できるか」という発想は、アフリカからイギリス国内へと調査の場はシフトしても基本的に変わっていなかった。ローズたちは人種差別に対する厳罰化を主張する一方で、移民の共同体の過密状況を根拠に次のようにも訴えるのである。

われわれの都市の一層貧困な地区にある過密住宅に、カラードたちを継続的に集中させることは好ましくない。それどころか、大変危険である。その危険は西インド系の場合最も大きなものである。マジョリティ社会から疎外され、彼らが住む地域の悪条件によって腐敗し隔離された共同体が成長する危険があるのである。¹⁴

ローズたちは移民の共同体を調査する中で、その劣悪な環境を改善しようとする一方で、その共同体自体の成長にも敏感に反応している。反体制的・対抗的な移民共同体の成長は、「人種間の調和」には「危険」であり、分散させる必要があった。このようなローズたちの提言は、「分割して統治せよ」という植民地支配の常套手段だということも言えるのである。そして、一見リベラルな表現を用いつつも、その実、植民地主義の「伝統」を引き継ぐこうした側面を持った報告書こそが、研究所の分裂、そして人種関係協会の誕生につながっていくことになるのである。

1972年の乗っ取り—人種関係協会の誕生—

1960年代後半から徐々に、このような研究所に対する批判が、その内部から見られるようになるが、そこで強いリーダーシップを発揮したのがアムバラヴァネル・シヴァナンダンであった。シヴァナンダンは1964年に研究所の図書館司書に就任しているが、当時の研究所を「気取ったエリート主義の団体」であり、その「視野には人種主義などというものはなく、あるのは人種関係だけ」だったと振り返っている¹⁵。シヴァナンダンは、「人種」をめぐる彼の違和感を共有する若い移民スタッフたちとともに、次第に研究所の最高機関である評議会に疑義を唱えるようになっていく。そして1972年4月18日の臨時全体会議に押しかけ、評議会の多数派に辞職をせまった。そして、その場で行なわれた採決により多数派は破れ、総辞職するに至ったのである。さらに新たに初の移民の議長が選出され、研究所の体制は一新される。しばしば「乗っ取り」と評される¹⁶この出来事により、研究所は人種関係の調査を目的とした政府のシンクタンクから、人種主義を問題にする、より政治化された反人種主義団体へ、ジョー・シムたちの表現を借りれば「人種関係の研究所」から「人種主義に抗する協会」¹⁷へと新しく生まれ変わったのである。

この時代、人種主義をめぐる論争として社会的に表面化したのは、極右団体国民戦線の台頭と社会主義労働者党を母体とした反ナチ同盟による反人種主義運動であった。しかし、こうした対立は労働・保守両党によって極右と極左による政治的対立として周縁化され、イギリス社会において人種主義そのものが問われることはなかった。一方、人種関係協会はこうした政治的趨勢を敏感に感じ取った。国民戦線のような政治的周縁部からの人種主義ではなく、国家による「移民法」「人種関係法」「ポリシング」といった制度的人種主義こそが自分たちが直面している喫緊の問題だと主張したのである。そしてこうした時代を生きるために、人種関係協会はアメリカにおける公民権運動やブラック・パワー運動の影響を受けつつ、「ブラック・アイデンティティ」について

の議論を重ねていた。その中で、イギリスにおける移民を「ブラック」としてつなぐものとして、「植民地主義の経験」や「反植民地主義」を想定し、それを基盤に反人種主義運動の連携を模索した。そして人種関係協会は、ノッティングヒル・カーニヴァルにアイデンティティ・ポリティクスの実践の場を見出し、出ていく。

反人種主義運動としてのノッティングヒル・カーニヴァル

人種関係協会がカーニヴァルに関わっていくのは1970年代半ばからである。とりわけ、1977年に協会が発行する『レイス・トゥデー』の編集長ダーカス・ハウがカーニヴァル企画・運営する組織のひとつ、カーニヴァル発展委員会の委員長に就任すると、事態が大きく変わっていく。ハウの委員長就任の過程¹⁸に、もともとノッティングヒルの住民によって組織されていた委員会内部から強い反発が起こったのである。そして、カーニヴァル発展委員会に対抗すべく、カーニヴァル芸術委員会という組織がつくられた。こうした反応に対し、ハウたちはどういう対応を取ったのか。委員長となったハウは、1977年最初の『レイス・トゥデー』にカーニヴァルに関する文章を寄せているが、その中でハウが懸念を示した事柄は警察によるポリシングではなかった。「脅威は内側からくる」と題されたこの文章において、彼は次のように述べている。

新たな、そしてより深刻な脅威が現れている。カーニヴァル発展委員会1976の大きな分裂が、1977年の祝祭を台無しにするおそれがある。カーニヴァル発展委員会がイベントを組織する責任を持った組織なのである。¹⁹

この文章では、個人名や特定の団体名を出されていない。しかし、文脈からして芸術委員会への警告であるのは間違いないだろう。さらに次のように続ける。

様々に編成された団体を、直接的かつ親密に代

表するたった1つの組織があれば十分である。別の形をとれば、われわれは混乱へと向かってしまうだろう。別の形をとれば、当日のイベントのスムーズな進行を妨げる問題に、われわれは悩まされるに違いない。²⁰

ハウは自分たちに反発して新たな委員会を立ち上げた者たちを「脅威」と言ってしりぞけ、カーニヴァルにかかわるいっさいの責任を発展委員会に託すように訴えている。強力な指揮権を持った一つの組織が管理・運営することによってのみ去年のような混乱は回避され、円滑なカーニヴァルが行なわれるというわけである。そして、「発展委員会は、カーニヴァルに熱狂する人々に情報を与え、またカーニヴァルの進行に影響を与えうる問題の情報を受け取る責任を引き受け」、警察と衝突しそうな移民たちを「監視」した。当日のカーニヴァルに参加した芸術委員会のメンバーは、誰に対しても暴力的行為をしていないにもかかわらず、ハウたちに「凶徒」(thug)と非難され、「ブラックコミュニティによる群衆の『ポリシング』」があったと語っている²¹。人種関係協会は77年のカーニヴァルにおいて、警察による組織化されたポリシングに対抗するため、発展委員会の組織化を目指した。その結果、自分たち自身が移民を「ポリシング」するに至ったのである。

1970年代のカーニヴァルは、カリブソやレゲエ、ラスタファリ運動など、移民たちが自分たちの置かれた状況下で形成してきたさまざまな「ディアスポラ文化」が交わりあい、常に開かれた文化空間を形成しつつあった。しかし、『レイス・トゥデー』を介して人種関係協会が深くかかわったカーニヴァル発展委員会は、警察のポリシングに対抗するために移民を「管理・組織」し、これに反発する移民たちを「内なる脅威」と呼び、「ポリシング」したのである。その結果、カーニヴァル自体を閉鎖的で内向きの性質へと変えてしまった。凝り固まった文化空間は、アイデンティティ・ポリティクスの実践の場ではなく、移民間のヘゲモニー争いの場に収斂していったのである。カーニヴァル発展委員会の分裂

と、その後のこうしたヘゲモニー争いが示しているのは、協会が主張した「『ブラック』が全体として緩やかにつながること」の困難さばかりか、「ブラック」という共通のアイデンティティの未成熟さであった。つまり、1970年代における人種関係協会によるアイデンティティ・ポリティクスの実践は失敗に終わったのである。逆にノッティングヒル・カーニヴァルにおいては、その実践を困難にさせるような移民間の軋轢を人種関係協会自身が生むことになり、80年代以降、体制はそこに容易に介入していくことになるのである²²。

2. 1980年代における抵抗のかたち

では、こうしたアイデンティティ・ポリティクスの失敗を目の当たりにしたシヴァナンダンは、80年代における抵抗のかたちをどのように構想していたのか。次にこの点を見ていくことにしよう。

反人種主義運動から複数の運動へ

1979年の総選挙での勝利によりサッチャー政権が誕生した数か月後、シヴァナンダンは反人種主義・ファシズム運動 (Campaign Against Racism and Fascism) という団体のインタビューを受けている²³。ここでの主な話題は、サッチャー政権が取り組もうとしていた移民受け入れの厳格化と国籍法の改正であった²⁴。このなかでシヴァナンダンはこうした政策がサッチャー政権独自のものとは捉えず、戦後労働党と保守党が結託して、連綿と築き上げてきた人種主義的政策であると糾弾している。国家による人種主義は一貫して発動されており、その形、規模、激しさを変化させ続けているということである²⁵。加えて、そのような変化を政治政党の主義や利害と関連付けるのではなく、グローバル資本と関連付けて考察していく必要があると指摘している。したがって、「階級闘争なき人種闘争は、文化的ナショナリズムに陥ってしまう。逆に人種闘争なき階級闘争は、経済主義に向かうだけだ」と運動のあり方に警鐘を鳴らす。しかし、ここで留意しておきたいのは、

シヴァナンダンはあくまで人種と階級に関する「自分たちの単体の運動」を念頭に置いている点である。

われわれの闘争の輪郭を概念化し決定しなければならぬのはわれわれなのだ。²⁶

保守党はわれわれにはっきりと示している。日々の暮らし、経験において、われわれを結束させる事柄に比べたらわれわれの差異などたいしたことではないということ。(中略)そしてそれが、1つの大衆運動 (a mass movement) を組織する大義と空間をわれわれに与えるのだ。²⁷

このように、サッチャーが政権を獲得した直後の時点で、シヴァナンダンはあくまでもブラックを主体とする単体の反人種主義運動を構想していたと考えられるのである。こうした彼のスタンスは、しかしながら、1983年に発表された論文「人種主義に挑戦すること：80年代に向けた戦術」において少し変化をみせることになる。論文の最後の部分を引用してみよう。

反人種主義と労働者階級闘争の協力は不可欠である。というのも、階級闘争なき反人種主義闘争は、文化的ナショナリストに留まってしまうからだ。しかし、人種闘争なき、女性・同性愛者・アイルランド人の闘争なき階級闘争は経済主義に留まってしまうのだ。²⁸

引用の前半部分の主張は、階級と人種は切り離すことができないということ強調している点において、79年のインタビューと変わっていない。注目すべきは後半部分であろう。反人種主義と労働者階級闘争の連携の重要性を認識するだけでなく、階級闘争を基盤に女性、同性愛者、アイルランド人とも結びついていく必要性を唱えている。つまり、反人種主義運動に別の論点を巻き込み、運動の多様性を重視している。そして、こうした主張をより明確に述べて

いるのが「たわごと」なのである。

「新時代」のたわごと

「たわごと」の正式なタイトルは「融解したものはすべて固まっている－新時代のたわごと－」(All that Melts into Air Is Solid: The Hokum of New Times)である。シヴァナンダンは、ホールたちが『共産党宣言』から引用した一文「形あるものはすべて融解する」(All that is Solid Melts into Air)を皮肉まじりにもじっている。シヴァナンダンの意図を正確に理解するのは難しいが、「新時代」におけるホールたちの現状分析の甘さを指摘していると考えられよう²⁹。シヴァナンダンのホール批判の根底には、イギリスの左翼（政党）に対する根本的な不信感がある³⁰。ホール同様、シヴァナンダンは労働党を「過去の穴居で拗ねている」³¹とその因習性を嘲笑する一方、返す刀でイギリス共産党にも厳しい批判を浴びせる³²。「新時代」論を展開している同党の機関誌『マルキシズム・トゥデー』では、マルクス主義的分析に基づいて下から社会を再考するという根本的な試みがなされていないというのだ。そうした基本的な「マルクス主義」がないまま、ヨーロッパ各国の共産党共々、ソ連型共産主義への失望からユーロコミュニズムという新たな「流行」が形成されているというわけである³³。一方で、「旧来の」マルクス主義者たちに対しては、「旧来の」生産様式が崩壊し新たな形が生まれてきている現状にあまりに無頓着であると突き放す³⁴。そして現代社会をマルクスに忠実に分析するという自身の立場から、「新時代」を次のように批判する。

「新時代」が説いているのは、端的に言って、経済決定主義から文化決定主義へと、世界の変革から言葉の変革へと、そして階級から個人へと焦点をずらせということなのである。³⁵

そしてもう一点、シヴァナンダンにとって「新時代」が「たわごと」に聞こえるポイントがある。それは、ホールが唱える「左翼はまずサッチャーに学べ。そ

して『新時代』の政治を取り戻せ。」という主張は、いったい誰に向けて発せられているのか、という問題である。「取り戻せ」ということは、以前それを有していたことが前提となる。とすれば、ホールの戦術は、少なくとも政治にコミットすることすらできない社会的マイノリティのものではないというわけである。

新たな抵抗のかたち

このようなホールらに対する批判が、シヴァナンダンに「新たな抵抗のかたち」をより鮮明なものにさせていくことになる。「新時代」のなかでホールとジャックスは「イギリスや他の先進資本主義社会は、同質性や画一化よりも多様性、分化、分裂といったものにますます特徴づけられる。」³⁶と指摘する。こうした「差異」を強調するホールらの現状分析へと不満と、70年代のアイデンティティ・ポリティクスの失敗という経験が重なり、シヴァナンダンは次のように訴えている。

もし、女性は女性、ブラックはブラックというように、(中略) 他を排した特定の抑圧に対して戦うならば、まずもって社会主義に寄与する普遍性を失うことになる。それだけでなく、ブラック対女性、アジア系移民対西インド諸島系移民、同性愛者対女性、といったような新たなセクト主義の過ちを犯してしまうことになるのだ。³⁷

移民第一世代であるシヴァナンダンが一貫して取り組んでいるのは反人種主義運動である。しかしそれはもはや単一の運動ではなく、他の社会的マイノリティとの共闘という形を想定していると言えよう。また一方で彼は「オールドファッション」な社会主義者でもある。このことと、「新時代の政治を取り戻せ」という提言の空虚感が、彼に次のような認識を実感させるのである。

労働者階級運動からわれわれが受け継いでいる

価値や伝統がまだまだ存在するのだ。それは誠実さ、仲間意識、寛容、共同体意識、国際主義の感覚、連帯は何度も何度もつくり直されなければならないという認識、そしてとりわけ他者の闘争を自分の戦いにもできる受容力である。(中略) 今日こうした伝統が確立し息づいているのは、サッチャリズムや新マルクス主義が共に公共の目から隠しているような場にいる人々の闘争においてなのである。³⁸

労働者階級の伝統を受け継ぎ、運動に普遍性を持たせよという主張は、共同体という言葉が持つ閉鎖性を想起させるかもしれない。しかし、他方で「他者の闘争を自分の戦いにもできる受容力」というものを重視している。これは運動において、他者の闘争を自分の闘争に取り込んで常に主導権を握れという意味ではない。次の引用には抽象的ではあるが、シヴァナンダンの考える運動のイメージが端的に表現されている。

様々な運動内(間)にはシンプルだが基礎をなす結びつきがある。(中略) 新しい社会運動が、お互いを開かれたものにし、より大きな社会問題(論争)に目を向けるとき、この結びつきは強固なものになる。その際、中心に向かうという視点を失わないまま脱中心的に行動しなければならない。端的に言えば、個別性から全体性へと動き、再び自分たち自身の場所に戻るということだ。³⁹

こうした内部が常に流動的・脱中心的で継続的な運動を、シヴァナンダンは「抵抗の共同体」(Communities of Resistance)と呼んでいる⁴⁰。重要なのは、「共同体」が複数形(communities)で表されていることである。それは80年代前半に想定されていた1つの大衆運動(a mass movement)とは全く異なるものだと言えよう。

3. 「抵抗の共同体」とは何か

では、シヴァナンダンが新たな抵抗のかたちとして構想している「抵抗の共同体」とは、具体的にいかなるものだろうか。最後にこの点を検討して、本論をまとめてみたい。

想定される単体の共同体 (a community)

「抵抗の共同体」とは複数形(communities)であり、さまざまな共同体の集合体であるが、それを構成する単体の共同体とはどのようなものが想定されているのであろうか。シヴァナンダンが例として挙げているのはブロードウォーター・ファームである。ロンドンのトッテナムにある移民が多く住むこの地区は、1985年に起こったある「暴動」の舞台となった⁴¹。この年の10月5日、この地区に住むフロイド・ジャレットという24歳の移民の青年が、道路税にかかわる問題で逮捕された。その後、4人の警官がジャレットの自宅を捜査し、そこでのやり取りの中で母親が心臓発作で亡くなってしまう。もとより、その数日前に同じロンドンのブリクストンで移民の女性が警官の発砲により大怪我をおっていたこともあり、フロイド・ジャレットの母親の死が移民たちの不満に火をつけ一気に「暴動」へと発展したのである。さらにこの「暴動」のなかで警察官一人が亡くなるという事態も生んだ⁴²。これを取り上げたシヴァナンダンが注目しているのは、出来事そのものというよりも、こうした抗議の声をあげる政治文化がこの地区で醸成されてきたことである。

コンクリートのゲッターに追いやられ、基本的な施設やサービスも奪われ、多くが無職で犯罪に手を染めやすい環境であったが、ここの住民たちは自分たち自身で生活を作り上げていくために集まったのだ。人々は託児所を構えて食事を与え、年金受給者のための集会所を設け、若者にはレクリエーション施設を用意したのだ。そしてその過程において、警察の介入に抵抗する政治文化を醸成していったのである。⁴³

1970年代からシヴァナンダンや人種関係協会は、「共同体の自助」を反人種主義運動の重要な課題に挙げていたが、ブロードウォーター・ファームはまさにその最たる例であり、こうした共同体をひとつの単位としてより大きな運動へとつなげていくことが企図されていたのである。

抵抗の実践例

ではこうした単体の共同体が「中心に向かう視点を失わないまま脱中心的に行動する」とは、いったいどのようなことなのか。シヴァナンダンが取り上げている「ブラッドフォード12」の例を見てみよう⁴⁴。1981年、イングランドの北西部に位置する都市ブラッドフォードで、12人のアジア系移民の若者が、ファシスト集団からの自衛のために火炎瓶のようなものを所持していたことで逮捕・起訴された。これに対しブラッドフォードの移民たちは「自衛は攻撃（犯罪）ではない」というスローガンを掲げ、12人の釈放を求めるデモを開始した。この運動は大規模な支持を獲得し、イギリス全土に拡大していくのであるが、注目すべきことは「女性、ゲイ、学生といったそれまで人種差別的暴力が自分たちの問題ではなかった集団」⁴⁵が積極的に関わったことである。この「ブラッドフォード12」と呼ばれる運動は、12人の無罪という結果につながっただけでなく、地方自治体による人種主義の厳罰化という成果ももたらした⁴⁶。

さらにシヴァナンダンが挙げる抵抗の実践例をもう1つみてみよう。1989年、トルコからイギリスに亡命してきたクルド人たちの諸権利を求めて声を上げたのが移民たちだった。彼（女）らは、クルド人たちの衣食住を世話し通訳を買って出る一方で、内務省によるクルド人の「拘禁と追放」に抗議するデモに携わっていった。こうした活動は、クルド人が従事したイーストロンドンの搾取工場（sweatshops）の労働状態の問題を浮き彫りにしたばかりか、イラクによるクルド人への化学兵器の使用、対クルド人政策をめぐるNATOを通じたイギリスとトルコの共謀といった国際的な問題へと繋がる

ものであった。

その他にもいくつか例が挙げられているが、シヴァナンダンがこうした活動に着目したのは、1つの問題を扱った抵抗運動が、一見その問題とは関係がないような人たちをも参加させつつ状況に応じて柔軟にそして偶発的に変化していく様子に、「抵抗の共同体」形成の可能性を感じたからに違いない。

「抵抗の共同体」に向けて

シヴァナンダンによれば、「抵抗の共同体」につながる社会運動には5つの特徴があるという。最後にこの点を確認して、「抵抗の共同体」のイメージをさらに具体化してみたい。

1つめは、運動が経済、社会、政治生活の草の根から派生し、失うものがなく選択肢を有しないが横のつながりをもった人々が声をあげてつくられる点である。言い換えれば、「自己ではなく共同体から、選択ではなく必要性から」発生したものなのだ。第2の特徴は、この運動が市民社会の領域に留まらないということである。シヴァナンダン曰く、人々は経験的に市民社会の向こうには国家が潜んでいるのを知っている。それはあらゆる街の通り、学校、病院の向こう側も同じである。さらに運動をすすめるうえで、この市民社会と国家の関係については次のように説明している。

闘争は市民社会から国家へと広がっていき、また戻ってくるというのを繰り返す。（中略）そしてその過程において、市民社会の領域も拡大させていくのだ。⁴⁷

第3の特徴は、こうした運動が多様な文化の政治ではなく、多面的な政治文化であるという点である。4つめはフェミニズム運動でうたわれているような「個人は政治的である」というような考えには与しないということである。それは運動を個人化させ、断片化させるからである。その代わりにシヴァナンダンが提唱しているのは「政治は個人的である」というスローガンである。彼によれば、前者はラディ

カルな個人主義を生み、自己実現と自己顕示へと陥らせる。一方後者は、ラディカルな社会を生み、共同体の生活スタイルに価値を見出すものだということだ。そして最後の特徴に「無言のモラル」が挙げられている。つまり、運動とは人間同士の単純な信頼から派生していくものだということだ。こうした特徴をまとめる形で、シヴァナンダンのようにこの論考を結んでいる。

個人的な抑圧に意識的になるということは、自分の感性を他者が被る抑圧、搾取、不正、不平等、不自由にも開き、その感性に従って行動することなのだ。そして個人や地域の事例を論点にし、論点を主義・主張に変え、主義・主張を運動へと発展させていく。その過程において、新たな政治文化である抵抗の共同体を築き上げるのだ。⁴⁸

「たわごと」におけるシヴァナンダンの議論は、繰り返しや錯綜している部分も多く、ややわかりにくい。しかし、新自由主義時代において個であること（あり続けること）への危機感が、「抵抗の共同体」の構想を生んだということは言えるだろう。しかし一方で、シヴァナンダンはそこにロマンチズムを求めてはいない。「運動内や運動間に矛盾は存在するだろう。またその実践が資本主義の利益に資することもある。そしてその時点で実践は否定される。」⁴⁹と述べているように、むしろ現実的であり、ペシミスティックですらある。このことは、新自由主義という「繋がれない時代」において、社会運動を形成していくことの難しさを浮き彫りにしているとも言えよう。

おわりに

シヴァナンダンが構想する「中心に向かう視点を失わないまま脱中心的に行動する抵抗の共同体」については、社会運動の様々な構成要素のあいだにどのような関係性を確立するかという点において、

ドゥルーズとガタリの「リゾーム」、ネグリとハートの「マルチチュード」あるいはメルッチの「ノマド論」、ラクラウとムフの「ポストマルクス主義論」などの議論と重ねつつ検討する必要があるだろう。しかしそれは一論文が担えるようなものではなく、今後の大きな課題である。ここではもう一度ホールとシヴァナンダンの関係に立ち戻ってみよう。

シヴァナンダンにとって、ホールはサッチャリズムをめぐる論敵であったことは間違いない⁵⁰。とは言え、そのことはここではさほど重要なことではない。本論文の目的はホールとシヴァナンダンのどちらが「正確に」サッチャリズムをとらえ、どちらが「洗練された」議論を展開しているか判定を下すことではないからである。必要なのは、新自由主義が席卷する現代において、われわれが彼らの議論をどのように読み活かしていくかということである。われわれはシヴァナンダンに倣ってアイデンティティを無視してしまえばいいのだろうか。しかし、ホールはあまりにもアイデンティティに固執しているとシヴァナンダンが批判したように、シヴァナンダンはあまりにもアイデンティティを軽視しているという批判もある⁵¹。この点に関して、鍵となってくるのがやはり「論敵」ホールなのだ。シヴァナンダンが意図していたかいないかは不明だが、「たわごと」では触れられていない1980年代におけるアイデンティティをめぐるホールの論考に「ニュー・エスニシティズ」というものがある。1988年の講演をもとにしたこの論考でホールが指摘しているのは、イギリスにおける移民のアイデンティティをめぐる2つの契機である。まず1つめはすでに見慣れたものである。

これは、イギリスにおける人種主義と周縁化という共通の経験を指し示すために「ブラック」という用語が作り出され、実際にはきわめて異なる歴史や伝統、エスニック・アイデンティティをもつ諸々の集団やコミュニティのあいだで新たな抵抗の政治を組織化するカテゴリーをその言葉が提供するに至った契機である。⁵²

これはまさに、1970年代、シヴァナンダンら人種関係協会の面々が実践したアイデンティティ・ポリティクスを指している。そして、これに対するシヴァナンダンの拒否反応もすでに確認したとおりである。重要なのは80年代における2つめの契機である。

ここで問題となるのは、「ブラック」というカテゴリーを構成している諸々の主体位置、社会的経験および文化的アイデンティティの尋常ならざる多様性を認識することである。つまり「ブラック」とはそもそも政治的、文化的に構築されたカテゴリーであり、(中略)したがって自然のうちにその保証を求められるようなものではないということの認識である。⁵³

ホールが指摘する2つめのアイデンティティの特徴は、個人や集団内に差異が内在していること、「自然で」「普遍的」立場を相対化している点、そしてアイデンティティの柔軟性もしくは偶発性である。シヴァナンダンが否定する固定的なアイデンティティはあくまでもホールがいうところの1つめの契機である。2つめに関してシヴァナンダンは言及していない。シヴァナンダンらの反人種主義運動が70年代と80年代では大きく変化したように、ホールによればアイデンティティの諸相もまたこの時代に変化したのである。この2つの変化はどのように関連するものなのであろうか。状況に応じて柔軟でありまた偶発的であるという2つ目のアイデンティティの特徴は、「抵抗の共同体」のあり方と重なる部分があるのではないか。だとすれば、次の課題となるのはシヴァナンダンとホールの議論を、文字通り重ねて読み「抵抗の共同体」におけるアイデンティティのありようを検討することであろう。

註

1 Ambalavaner Sivanandan, 'All that Melts into Air Is Solid: The Hokum of New Times', in *Communities of Resistance: Writings on Black Struggles for Socialism*, London / New York: Verso 1990, pp.19-59. 以下、本文では「たわごと」と

略す。

- 2 デヴィッド・ハーヴェイは新自由主義の理論と国家の役割を次のように定義している。「新自由主義とは何よりも、強力な私的所有権、自由市場、自由貿易を特徴とする制度的枠組みの範囲内で個々人の企業活動の自由とその能力とが無制約に発揮されることによって人類の富と福利が最も増大する、と主張する政治経済的实践の理論である。国家の役割は、こうした実践にふさわしい制度的枠組みを創出し維持することである。」デヴィッド・ハーヴェイ(渡辺治監訳)『新自由主義とその歴史的展開と現在』(作品社、2007年)10頁。
- 3 安倍晋三が自ら「アベノミクス解散」と称して行われた2014年12月14日の第47回衆議院議員総選挙の結果も、そうした例のひとつであろう。
- 4 1980年代を通じて、ホールはマーティン・ジャックスらとともに、イギリス共産党の機関誌『マルキシズム・トゥデー』上でサッチャリズム分析を展開していった。その主な成果が、Stuart Hall / Martin Jacques (eds.), *The Politics of Thatcherism*, London: Lawrence & Wishart in association with *Marxism Today*, 1983, Stuart Hall, *The Hard Road to Renewal: Thatcherism and the Crisis of the Left*, London / New York: Verso, 1988, Stuart Hall / Martin Jacques (eds.), *New Times: The Changing Face of Politics in the 1990s*, London: Lawrence & Wishart, 1989である。
- 5 Hall (1988), p.167. この章は以下のとおり訳出されている。スチュアート・ホール(野崎孝弘訳)「グラムシとわれわれ」『現代思想』26-4(青土社、1998年)、116-128頁。さらに『現在思想』42-5(青土社、2014年)に増補新版として載録されているが、訳などの変更はない。
- 6 デヴィッド・ハーヴェイ(本橋哲也訳)『ネオリベラリズムとは何か』(青土社、2007年)、29頁。
- 7 Hall (1988), p.167.
- 8 ホールらの議論に批判的な論考として、Ralph Miliband, 'The New Revisionism in Britain', *New Left Review*, 150, March-April, 1985, Bob Jessop / Kevin Bonnett / Simon Bromley / Tom Ling, *Thatcherism: A Tale of Two Nations*, Cambridge: Polity Press, 1988などがある。
- 9 Stuart Hall, 'Introduction', in Ambalavaner Sivanandan, *A Different Hunger: Writings on Black Resistance*, London: Pluto Press, 1982.
- 10 派生したというよりは機関誌*Race Today*の編集をめぐって「袂を分かった」と表現した方が適切かもしれない。詳細については、Robin Bunce and Paul Field, *Darcus Howe: A Political Biography*, London: Bloomsbury, 2014を参照のこと。
- 11 シヴァナンダンたちが自ら「失敗した」と言っているわけではない。詳しくは、拙稿「移民の対抗文化に見るアイデンティティ・ポリティクスの実践-戦後イギリスにおける

- 人種関係協会の活動をめぐって-」(博士学位論文)(大阪大学、2013年)を参照のこと。
- 12 人種関係協会、人種関係研究所ともにthe Institute of Race Relationsであるが、ここでは組織の性格の違いを考慮して訳しわけている。
 - 13 Jim Rose and Associates, *Colour and Citizenship: A Report on British Race Relations*, London: Oxford University Press, 1969.
 - 14 Rose, p.679
 - 15 Kwesi Owusu. 'The Struggle for a Radical Black Political Culture: an Interview with A. Sivanandan', in Kwesi Owusu (ed.) *Black British Culture and Society: a Text Reader*, London / New York: Routledge, 2000, p.418
 - 16 Alana Lentin. *Racism and Anti-Racism in Europe*, London / Ann Arbor: Pluto Press, 2004, p.104
 - 17 Joe Sim, Phil Scraton and Paul Gordon. 'Introduction: Crime, the State and Critical Analysis', in Phil Scraton (ed.), *Law, Order and the Authoritarian State: Readings in Critical Criminology*, Milton Keynes / Philadelphia: Open University Press, 1987, p.30
 - 18 1976年8月のカーニバルは、警察と参加者たちによる「大暴動」に発展した。そこで翌月、ダーカス・ハウは「公開状」を発展委員会に送った。ハウはまず、「ノッティングヒルやその他のあらゆる路上でのカーニバルの禁止を主張するために、8月30日月曜日のブラックと警察の衝突が、われわれの敵によって利用されるだろう」と指摘し、「あなたがたはわれわれの提案を無視し、自分たちのやり方を通した。その結果、あなたがたはあらゆる局面でロンドン警視庁に出し抜かれ、策略にはまったのだ」と、発展委員会を批判した。そして、委員会のメンバーを投票によって決めるよう要求した。当時の委員長であったセルウィン・パティストは、ハウの申し入れを受諾し、投票の結果、ハウが委員長に就任したのである。
 - 19 *Race Today* 9-1, 1977
 - 20 *Ibid.*
 - 21 Cecil Gutzmore. 'Carnival, the State and the Black Masses in the United Kingdom', in Winston James and Clive Harris (eds.) *Inside Babylon: The Caribbean Diaspora in Britain*, London / New York: Verso, 1993, p.229
 - 22 1979年、人種平等委員会は、カーニバルに対する助成金の支出に、「唯一公式なカーニバル団体と認められる一つの組織が、芸術面、教育面、商業面、そしてコミュニティを発展させていけるよう作られるべきである。」(*Race Today* 11-4, 1979)という条件をつけた。さらに芸術審議会も翌年、発展委員会への助成をストップした。このことについて『タイムズ』は次のように伝えている。「ノッティングヒル・カーニバルを管理・運営する2つの委員会のひとつが芸術審議会からの助成金を取り消された。主な理由としては委員会の過去の収支報告に、審議会が満足しなかったことが挙げられる。このことと、カーニバル発展委員会が人種平等委員会から援助を受けない決定により、同委員会は、カーニバルの6週間前にしてまったく資金を得られていないままである。ライバルであるカーニバル芸術委員会は人種平等委員会から3000ポンド、同様に芸術審議会から2000ポンドの助成金を受けることになっている。」(*The Times*, 18, July, 1980) このように、芸術審議会、人種平等委員会は警察や内務省と連携して、カーニバル芸術委員会に運営を一本化させ、1980年代のカーニバルはおこなわれていくことになる。
 - 23 *Race & Class*, 21-3, 1979
 - 24 1981年国籍法改正において、「連合王国および植民地市民権」が廃止され、新たに市民権のカテゴリーが「イギリス市民権」、「イギリス属領市民権」、「イギリス海外市民権」の3種類に分けられた。そして、1971年移民法によりイギリスへの自由な入国・居住の権利を保証された「ベイトリアル」のみに、イギリス市民権が与えられたのである。イギリスのパスポートを持ったものたちに自由に認めていたイギリスへの移住を制限し、「血統」で選別することを目的としたこの「移民法」は、それまでの個人的な差別から、国家の制度的・構造的な差別への移行を画するものだと言えよう。
 - 25 シヴァナンダンは国家による制度的人種主義をracism、個人による人種差別的言動をracialismというように区別し、前者を問題視する姿勢をとっている。
 - 26 *Race & Class*, 21-3, 1979, p.295
 - 27 *Ibid.*, p.296
 - 28 Ambalavaner Sivanandan, 'Challenging racism: strategies for the 80's', *Race & Class*, 25-2, 1983, p.11
 - 29 シヴァナンダンによるホール批判は、以下の文献でも検討されている。Michael Keith and Malcolm Cross. 'Racism and the Postmodern City', in Michael Keith and Malcolm Cross (eds.), *Racism, the City and the State*, London / New York: Routledge, 1993. Neil Lazarus. *Nationalism and Cultural Practice in the Postcolonial World*, Cambridge: Cambridge University Press, 1999. Jenny Bourne. 'Racism, Postmodernism and the Flight from Class', in Dave Hill, Peter McLaren, Mike Cole, and Glenn Rikowski (eds.), *Marxism against Postmodernism in Educational Theory*, Lanham: Lexington Books, 2002. Pathik Pathak. *The Future of Multicultural Britain: Confronting the Progressive Dilemma*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2008.
 - 30 Gen Doy. *Black Visual Culture: Modernity and Postmodernity*, London / New York: I. B. Tauris Publishers, 2000, p.78
 - 31 Sivanandan (1990), p.20
 - 32 ホールは『マルキシズム・トゥデー』の編集に積極的に関わっていたが、彼自身がイギリス共産党に所属したことはない。

- 33 ユーロコミュニズムについては、サンディアゴ・カリリョ（高橋勝之、深澤安博訳）『「ユーロコミュニズム」と国家』（合同出版、1979年）などを参照のこと。
- 34 Sivanandan(1990), p.24
- 35 Ibid., p.49
- 36 Hall and Jacques(1989), p.11
- 37 Sivanandan(1990), p.32
- 38 Ibid., p.51
- 39 Ibid., p.33
- 40 Ibid., p.51
- 41 この出来事に関しては、Ian Herson. *Riot! : Civic Insurrection from Peterloo to the Present Day*, London: Pluto Press, 2006, pp.197-217, Brian Harrison. *Finding a Role? : the United Kingdom, 1970-1990*, Oxford: Clarendon Press, 2010, pp.187-208を参照のこと。
- 42 この事件では6人が逮捕され、そのうち成人3人が殺人罪で有罪判決を受けたが、1991年、証拠不十分で無罪となった。
- 43 Sivanandan(1990), p.52
- 44 「ブラッドフォード12」および、イギリスのアジア系移民と警察の関係については、以下の文献に詳しい。Colin Webster. 'Policing British Asian Communities', in Roger Hopkins Burke (ed.). *Hard Cop, Soft Cop: Dilemmas and Debates in Contemporary Policing*, Cullompton: Willan Publishing, 2004.
- 45 Sivanandan(1990), p.54
- 46 たとえば、1984年ロンドンのニューアムでは、隣人のブラックに対する継続的な嫌がらせを理由に、白人家族に対し強制退去が言い渡された。
- 47 Sivanandan(1990), p.57
- 48 Ibid., p.58
- 49 Ibid., p.34
- 50 Claire Alexander. 'Introduction', in Claire Alexander(ed.). *Stuart Hall and 'Race'*, London / New York: Routledge, 2011.
- 51 John Gabriel. *Racism, Culture, Markets*, London / New York: Routledge, 1994, p.177
- 52 スチュアート・ホール（大熊高明訳）「ニュー・エスニティズ」『現代思想』26-4（青土社、1998年）、80頁
- 53 同、82頁

（いながき・けんじ 一般教育等／歴史学・社会学）

（2015年10月30日 受理）